

---

# 香坂遥とラブレター

綾畝章人

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

香坂遥とラブレター

### 【Nコード】

N1446C

### 【作者名】

綾畝章人

### 【あらすじ】

あたしの後ろに座っている「名探偵」香坂遥がラブレターを受け取った。しかし彼女はそれが偽物であると推理する。遥とあたしは罖を張り、ラブレターを送った犯人を見つけ出す。

## 香坂遥とラブレター「前編」

我が友、香坂遥は名探偵である。

あたしも詳しいわけじゃないけど、警視庁の偉い人の娘で将来の夢は刑事になることっていう本物だ。

記憶力や判断力もよくて、成績も優秀。名探偵の名探偵たる由縁だ。

もつとも、体力の方には問題を抱えていて、体育の成績は中の下といったところだし、たいていはあたしの後ろの席で分厚い本を読んでもるもやしつ子だ。運動面を何とかしないと将来の夢は遠いぞ。で、今日みたいないていでない時、特別に何かトラブルがあったら、今日みたいなたいていでない時、特別に何かトラブルがあったら、相談に来る人がいたり、そうでなければごく稀に彼女をからかってみよう、なんてのが来てたりする事もある。

前者の場合は、2言3言で問題を解決してお礼を言われて別れる、っていうのがパターンだし、後者の場合は適当にあしらわれて追い返されるのがパターンだ。今日は

「ホント、あんたってつまんないわねえ」

どうやら後者のようだ。

罵声を浴びせたのはクラスメイトの小島さんで、でも完全に諦めたわけじゃないらしく、どちらかというと挑発するようなイントネーションだ。実際、まだ遥の表情をうかがっている。

それでも遥が反応しないでいると、いいかげん諦めたらしく、すつくと立ち上がって、はあ、とこれみよがしに肩をすくめてから、立ち去っていった。

「どうしたの？」

遥は別にそこまでつまらない娘じゃない。口数は少ないけどたいていは相手の話題に合わせて会話をする。些細な事で角を立てわざわざトラブルを起したりする事をしないだけだが。

「好きな人はいるのか？ だって」

遥がつまらなそうに答える。

「はあ、それは無理だ。男に限った話じゃないけど、噂話のネタを求めてそんな事を聞いたって、拒絶されるに決まってる。彼女はそういう興味本位の質問は受け付けない。そういうところは不器用で、適当に受け流すっていうのができない。学年一の人気者でサッカー部期待の星、斉藤君と言っておくとかいうあらしい方がね。みんな「いいよね」って言うってんだし、先週末の練習試合で大活躍して株を上げたばかりだ、そういう質問の答えには適当だと思っただけど？」

「嗤うつもりは相手に？」

「はあ、陰で嗤うための詮索だと見抜いていらっしやいましたか。」

別に会話を聞いていたわけじゃないけど、彼女が言うなら実際そうだったんだろう。こと、ものごとを観察し、洞察するって事に関して遥は滅多に間違えない。小学校からの付き合いだが、3回、いやあれを数えていいのかが微妙だから、2回しかなかったと思う。

それに相手はあの小島さんだ、彼女の性格を考えればありそうな話だ。悪い人じゃないんだけどね……。

確かに、相手が陰口をきくつもりで聞いてきたんだったら、学年のトップアイドルなんてぶつけるわけにはいかない。いい物笑いの種だ。

「じゃ、しょうがないか」

「そう」

言っただけで彼女はひとつ溜め息をつき、ショートボブの髪を揺らした。そして中断していた読書を再開するのだった。

事件はその翌日に起きた。いつものようにあたしが時間ギリギリに登校すると、何だか空気がおかしい。クラスメイトが遠巻きに遥を見てひそひそ話をしていたりする。

「おはよ、遥。……どうしたの？」

「ラブレターのようなものが届いてた」

へえ、それはそれはと、流そうとしてあたしは驚く。

「って、ラブレター!?!」

「のようなもの」

何だか知らないがこだわりがあるようだ。

「好きです、とか書いてあるんでしょ」

こくりと頷く。ショートボブの髪がサラッと流れる。

「じゃ、ラブレターじゃない」

何が不満なんだろう? 彼女の不満気な態度は分からないが、クルスメイトの態度には納得がいった。これは好奇心による包囲網なのだ。気持ちは分かる。

しかしそこでチャイムが鳴り、あたしの話は遮られてしまった。

次の休み時間。あたしは廊下で素早く遥を捕まえた。

人前では色々と話しづらいだろうから、そのまま人気のない適当な空き教室に連れ込む。ふふふ、逃がさないわよ。

「さて、ゆっくりと話を聞かせてもらいましょうか」

あたしは遥とドアの間に立ちはだかると、宣言した。

「そうね……まずは、これを見て」

素直にそのラブレターを渡す遥。よーしいい子だ。

薄い緑の便箋2枚に思ったより綺麗な字が並んでいる。なになに、以前からずつと気になっていました……。

「あれ? これまだ続きがあるんじゃない?」

2枚目を読み終わったあたしは不満の声を上げる。途中で切れていたし、あたしの肝心の差出人の名前がまだ出てきていないのだ。

「差出人を教えないうえにここまで、それが大切だから」

大切って、そんな殺生な。

「それ、誰かが作った偽物」

え? 遥が告げたまらない事実にあたしは驚く。あたしは気付く事ができなかった。

でも、これが偽物だとして、それでもあたしにこれを見せたって事は、何か考えがあるって事？

遥は小さく頷くと、正面からあたしの目を見て言った。いつもの冷静な声で。

「協力して」

逃がしてもらえそうにないのは、あたしの方だった。

## 香坂遥とラブレター「後編」

その機会はお昼休みにやって来た。あたしと遥がお弁当を食べていると、普段は来ないような人が徐々に集まってきた、食べ終わる頃にはすっかり人の輪に埋もれている。話すまで逃がさないわよって雰囲気だ。

「それでえ、今朝の話なんだけど」

お、勇気ある突撃者が現れたぞ。さてと。

「今朝の？」

遥が冷たく切り返す。

「ラブレターとか」

「とか？」

これも打ち合わせた作戦のうち。遥は徹底してその話題を避ける。まあ、偽物だと判断した以上、迂闊に浮かれているフリなんてしない方がいいしね。

「あー、その話なら遥に振っても無駄よ」

そこであたしが割って入る。さも何か知ってます風に。

「それが割と情熱的な内容でさ、遥も隅に置けないわね」

あたしは実際に半分以上読ませてもらったし、その内容については話してもいいと許可をもらってる。あたしは一気にまくし立ててる。今回あたしの役割は、よく分かっている第三者としてこの話題を盛り上げる事らしいから。よく分かっているじゃないってあたりが内心微妙だけど、確かに分かってないし、実際クラスメイト達があたしの話に食いついてくるのだから適任だったのかもしれない。この中に、あの偽物を作った犯人がいるのかな？

「昨日の今日でずいぶんな態度じゃない」

その声はクラスメイトの輪の外から振ってきた。小島さんだ。

「まあ、ラブレーター貰って嬉しい気持ちは分かるけどね」

小島さんはずんずんと人の輪を輪って進んできて、遥と対峙した。

「別に」

にべもなく遥が切って捨てる。

「別について、そんなこと言っちゃって、本当は嬉しいんでしょ？」

素直に言いなさいよ」

遥は首をかしげる。偽物だからねえ。とはいえここで盛り下がるのはまずい。犯人探しのために周囲を盛り上げないといけない、つて念を押されていたのであたしはあわてて言った。

「あー、遥の反応が薄いのはいつもの事じゃん。きつと内心は喜んでるのよ」

あたしの苦しいフォローに、小島さんも追従してくれた。

「それにしたって……斉藤君からだっただって？　すごいじゃない。もつと喜びなさいよ」

え？　小島さん、どうして？

遥がようやく微笑んだ。

「小島さん、どうしてあなたが差出人を知ってるの？」

「え？　だって、さっきあなたたちが話してるの聞いちゃったから」  
遥の突っ込みに、小島さんが慌てて言い繕う。

「私、誰にも言っていない」

あたしが遥の言葉を肯定する。

「うん、あたしも知らなかった。そっか、斉藤君だったんだ」

それが大切ってこういう事だったんだ。

まんまと遥の罠にはまり、小島さんは言葉を失う。

取り囲んでいたクラスメイト達がざわついている。いまやラブレーターが彼女の悪戯だったことは明白だ。

「ラブレーターの差出人を知っているのは、あたしと、本当にこれを書いた人だけだった」

真つ青な顔をして立ち尽くしている小島さんに、遥が追い討ちをかける。

「あなたなんですよ？ 小島さん」  
ゲームセット。

「すごすごと退散していく小島さんを見送った後、あたしは遥に聞いてみた。」

「で、どこで偽物だって疑ったの？」

「もちろんいつもの謎解きを期待して、だ。」

遥はにっこりと微笑む。そういう笑顔を男子に向ければ、本物のラブレターだつてもらえると思うんだけど、彼女が笑うのは謎が解けてすつきりとした時だけ、もつたいない。

彼女はラブレターの実物を取り出しながら言う。

「まずタイミング」

彼女が言うには、先週末にサッカー部の試合があつた事を考えると、「以前からずつと気になっていた」なら試合前に告白している方が自然であり、試合後の告白というのがそも疑わしいとのこと。そうかももしれない。

「次にこの便箋」

次に彼女が指摘したのは、ラブレターに使われた便箋だった。何でもこの便箋が売られているのは駅前のデパート内の文房具屋のみであり、これは自宅通学の斉藤君の行動圏からは外れているとのこと。確かに、あつちにも文房具屋や別のデパートがあるもんね。わざわざ駅前まで出て買うつてのは考えにくいか。

「それにこの便箋、梅雨明けには店頭から消えてた」

「薄い緑は季節を意識した色だったのね。ってそうじゃなく？」

「ああ、このタイミングのラブレターに使うには、以前に買って置いて置きで持っていなければならず、おかしい。試合前に書いて出せずにいたのなら、自分が活躍できる試合の事に触れていないのは不自然。確かに。」

「そして筆跡。特に名前の筆跡が違うのが致命的」

筆跡が違うって、どこで確認しましたか、あなたは。」

「図書カード」

こともなげにおっしゃる。そういえば、入学早々に全員作らされたっけ。あれは自分で名前を書かないとダメで、一冊も本を借りてなくても名前だけは比較できるからね。しかし、名探偵殿はいつの間にか裏付け捜査まで済ませていたんだらう。おそろべし。

「内容も疑問。まず挨拶だけど……」

はあ。所属するコミュニティ、サッカー部員の用語との相違や、C組男子の用語との相違などを並べられても正直あたしには分からない。そこまで細かく聞いてないし、覚えてないから。

あたしはちよつと小島さんに同情した。さすがに相手が悪かったね。

「それに」

ひとしきり用語の疑問点を並べた後、彼女は紙を裏返した。うっすらと緑がかつたまっさらな紙だ。

「筆圧もない」

なるほどこれは分かりやすい。スポーツをしている男子が書いた字ではない、という事ね。

彼女は凹凸の無い紙面をしげしげと眺め、しきりに感心する私の手からラブレターを取り上げると、それをカバンに閉まってしまった。

「……とつとくの？」

「見せ物にする？」

ごもつとも。これだけの大騒ぎになれば、ゴミ箱なんかには捨てたら物好きな連中に回収されるに決まってる。そうならなんとなく斉藤君に悪いし、何より小島さんが可哀想だ。

彼女は代わりにいつものように分厚い本を取り出した。机の上に広げて視線を落とす。ショートボブの髪が傾き彼女の目を隠す。

やれやれ、これにて事件解決、相変わらず見事なものでした。……と言いたいところだが、あたしにはひとつだけ気になっている事

があった。ちよつとプライベートに立ち入る事だけど、それを聞かせてもらつぐらいの権利はあるはずだ。協力のお駄賃といったところだ。

「ところでさ、遥」

「何？」

少しだけ顔を上げた遥が答える。

「そこまで分かっているんならさ、小島さんを罠にかける必要なんてなかったんじゃないの？」

「……全て推理。確かな証拠はなかったし、本当の差出人は分からなかったから」

「ふーん」

少し間を置いて、思っていた事をぶつけてみる。

「本物かもつて、ちよつとは期待していた、とかじゃなくて？」

「……」

彼女はそれには答えてくれなかった。ふふん、相変わらず不器用よね。十分な答えになってるわよ。

我が友、香坂遥は名探偵である。

であるが、ちよつぴり素直じゃない普通の女の子でもある。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1446c/>

---

香坂遥とラブレター

2009年3月24日09時20分発行